

12. 地域からの帝国論—比較史と現在

日時：2010年10月29日(金) 13時～15時30分

場所：札幌コンベンションセンター小ホール

司会：林忠行（北海道大学）

報告：

岡本隆司（京都府立大学）「主権」の形成—20世紀初頭の中国とチベット・モンゴル」

森まり子（東京大学）「民族自治から主権国家へ—帝国解体期のシオニズム運動における民族分離主義の変容 1881～1948」

宇山智彦（北海道大学）「グレートゲーム再考—中央アジアにとっての帝国間競争の意味」

討論：川島真（東京大学）

これは、第4班が中心となって、日本国際政治学会2010年度研究大会部会4として開催された研究会である。19世紀後半から20世紀前半の帝国間競争が、諸地域における主権概念や統治、民族運動のあり方などにどのような影響をもたらしたかを比較史の観点から明らかにし、ひいては現在の国際政治の多面的な理解に資することをめざして企画された。

岡本報告・森報告の詳細は、本報告集の第1部に収録されたペーパー全文の通りである。簡単にまとめるなら、岡本報告は、中国の外モンゴルに対する宗主権と外モンゴルの自治を承認した1913年の露中宣言、およびチベットについて同様の規定をした1914年のシムラ会議の条約案の成立過程を検討し、イギリスの言う「宗主権」概念が中国のチベットへの主権を否定するためのものだったこと、逆に中国は、属国に対する宗主権を認められただけでは、チベットや外モンゴルも朝鮮やベトナムのように中国から分離してしまうと恐れ、「主権」の主張を強めたことを指摘した。

森報告はシオニズムと諸帝国の関係を論じた。パレスチナに移住したユダヤ人は、ロシア帝国からポグロム被害者としての意識とヨーロッパ人征服者としての意識を持ち込むとともに、オスマン帝国のミット制や治外法権に分離主義へのヒントを見出し、オーストリア＝ハンガリー帝国の社会主義者による民族の文化的自治論をアラブ人の主権の否定に利用し、さらにはイギリス帝国から分断国家と住民移送のモデルを学んだのである。

宇山報告は、ロシアと清朝の中央アジアへの拡大や英露間の競争において、小国・小地域の勢力が時に主体的で重要な役割を果たしたが、これが長期的には帝国への従属につながったこと、帝国が公正と安定をもたらす限り多くの人々は帝国支配に順応しよう

としたが、近代化と民族運動の時代には、帝国が文化的・政治的な手本や活動機会を提供できるか否かによって帝国への態度に分岐が生じたことを論じた。

討論者の川島は、3つの報告のテーマやアプローチはそれぞれ異なるが、全体として「地域からの視点」と「地域についての議論」を組み合わせ、帝国の比較と関係性を論じていることを評価した。そして、主権や国境といったルールが単に上から下に伝わっていくのではなく、現場のルールが大国に組み込まれていく面もあることを指摘したうえで、最終的にはパワーゲームとリアリズムの論理が大きく作用しているということなのかと問いかけた。また岡本報告に対しては、イギリスはなぜ清朝のチベットにおける外交権を認めたのか、森報告に対しては、シオニズムの側が諸帝国に与えた影響はあるのか、宇山報告に対しては、清とロシアの関係は不平等であり、中央アジアの人々にとってもロシアのパスポートを持っていた方が有利だったはずだが、それでも皆がロシアの臣民になろうとしたわけではないのではないかという質問を行った。

司会者の林からは、戦間期という時期に注目するなら、オーストリア＝ハンガリー帝国の崩壊によって領域的主権国家となったチェコスロヴァキアなどがシオニズムに与えた影響も考え得るのではないかという質問と、チベット、中央アジア、パレスチナのすべてにジョージ・カーゾンが関与していることからイギリス帝国の存在感が読み取れるとの指摘があった。フロアからも、イスラエルが米国などに強い影響力を持っている背景に、かつて諸帝国から得たノウハウがあるのではないかという質問や、イギリスは南アフリカでトランスヴァールなどを併合する際にも宗主権概念を使ったというコメントなどが、活発に出された。

全体としてこの部会は、時期的にも空間的にも非常に幅広いテーマを取り上げながら、帝国間や大国・小国間の国際関係に長期的に見られる特徴と、主権概念の形成や民族運動によって変化する面の両方を検討することができた。